

vol.8

選書者：西田博至

(神戸市立三宮図書館 館長)

●『グリーンバーグ批評選集』 著者：クレメント・グリーンバーグ

この本に入っている、キュビズムの画家たちが発明した「コラージュ」について書かれた批評文を読んでもみると、絵の表面を、まるで舐めるように近寄ったり、ぐっと離れてみたり、矯めつ眇めつしながら、じっと見つめているグリーンバーグのよく動く鋭い目玉のさまが、とてもよく判る。読むことで、絵を凝視する彼の視線の軌跡を、トレースしているような気持ちになる。「絵を見る」というのは、こんなにも頭の中でいろんなことが繋がったり炸裂したり生まれたりする、すさまじい体験なのかと、驚く。

●『失われた時を求めて』 著者：マルセル・プルースト

読み始めてもう十年も経つけれど、気が向いたときにしか読まないで、まだ『ソドムとゴモラ』の下巻の途中までしか読んでいない。まだ読み終わっていないくせに、また読み返すだろうと思っているから、細かいところは覚えていなくても、前にページを閉じたところから戻らずに、そのまま読み進めている。

図書館では、フランス文学の棚に入ることが多い本だが、読んでいる実感としては、小説だか批評だかエッセイだかよく判らない。どこに連れてゆかれるのかもよく判らない。登場人物の多くが変だが、おそらく語り手こそが、群を抜いて変である。でも、読んでいると、とても気持ちがいい。そして、ときどきこの本を読んでいた場所とか空気と、本の中身のかげらがくっついて、ありありと覚えている時もある。

●『啓蒙の弁証法』 / 『啓蒙の弁証法を読む』

著者：M. ホルクハイマー, T.W. アドルノ / 上野成利, 高幣秀知, 細見和之

難しいけど面白いという本もある。そういう本の面白さとは、だいたい、全然そういうふうには思っていたり見えたりしていなかったものが、まったく別の姿で現れてくる驚きのことなので、やはり前提が判っていないと、ただ難しいだけで終わってしまう。

だから、読んでみたら面白いけど難しい本には、その本を読むための本がある。入門書だ。いい入門書には、「これを読んだら、次は実際に難しい本も読んでみてね」と書いてある。旅行のガイドブックで名所やお店を知ることの楽しさと、実際にその場所に行ってみて、土地の風や光を肌で感じることは、たぶん違うからだ。

●『増補 普通の人びと』 著者：クリストファー・R・ブラウニング

ちくま学芸文庫のカバーのタイトルをよくみると、「普通の人びと」が、ぱきんと壊れているのが判る（カバーのデザインは細野綾子さん）。神戸のような大きな港町だったドイツのハンブルクで、セールスや、倉庫や運送の仕事や、紅茶の輸入などに従事していた、どこにでもいる一般の市民から「ランダムに徴兵され」て編成された「第101警察予備大隊」は、独ソ戦開始後のポーランドに送られると、ユダヤ人の大量虐殺や強制移送を繰り返し実行した。この本は、ごく「普通のドイツ人」だった彼らが、どのように「自発的殺戮者」になっていったのかを、残された資料から克明に再現して、詳しく分析してゆく。

ウクライナやガザや世界のあちこちで、「普通の人びと」による「普通の人びと」の虐殺が続いている。私たちもまた「普通の人びと」として、どうすれば壊れず、壊されずにいられるのか。これを考えるためにも、もう終わってしまった遠い国の話としてではなく、今、読んでおきたい。

●『写真講義』 / 『挑発する写真史』

著者：ルイジ・ギッリ / 金村修，タカザワケンジ

イタリアの写真家ルイジ・ギッリが学生にレクチャーした記録をまとめた『写真講義』と、日本の写真家金村修が、写真評論家のタカザワケンジと、古今東西の写真家について語った『挑発する写真史』。ギッリと金村の撮った写真も載っているが、穏やかな光が柔らかな埃のように物を覆っているカラー写真と、片隅に覗いている空の他は、フレームにぎっしり都市の断片が埋め尽くされているモノクロ写真では、やはり真逆の感じがする。しかし、2冊を読んでも、「レンズを変えたり、奇妙なテクニックを使って、あっと言わせようとは思いません。不思議、神秘、多様性、わずかな異なりというものは、意図的にそうしようとするより、普通に撮っているときのほうが見つかるものです」というギッリの言葉が、金村の語る言葉のようにも聞えてくる。さて、白い本から読むか、黒い本から読むか。